

# 夢を

本当の  
ゴールは  
まだ遠く

# 追って

夢を追い続ける大人たち。  
これまでの道のり、  
将来の目標、  
そして子どもたちへの  
メッセージを届けます。

## アジア、アフリカ、中南米で

## 国際医療を経験！

## 人財育成にも力を注ぐ

— 国立国際医療研究センター —

国際医療協力局

運営企画部長

仲佐保氏

**さまざまな人と出会い  
視野を広げた学生時代**

私が子ども時代に熱中したのはバスケットボールです。学校が終わると友達と遊んではばかり。どこにでもいる「活発な男の子」という感じでした。当時は読書にも熱中し、さまざまな本を読みました。特に感銘を受けたのが、医者であり哲学者でもあったアルベルト・シュヴァイツァーの伝記です。アフリカで医療活動を続けた彼の生き方に魅力を感じ、「将来は海外で働いてみたい」と夢を抱きました。

しかし、医者になりたいという強い気持ちはまだ持っておらず、勉強よりも遊びに夢中の毎日。受験を意識することもなく地元の公立中学、都立高校



●なかさ たもつ

- 1954年 東京都中央区に生まれる
- 1980年 広島大学医学部卒業後、国立病院医療センター(現国立国際医療研究センター)で研修医となり、翌年にカンボジアの難民キャンプで医療活動を行う
- 1984年 NGOのメンバーとしてエチオピア飢饉被災援助に参加
- 1986年 センター内に国際医療協力局が発足。初期メンバーとして、多くのプロジェクトに参加する
- 2010年 国際派遣センター長に就任、2012年より現職。主に開発途上国における医療システムの構築や人材育成を担う

へと進学しました。学校には、受験勉強に打ち込む子やスポーツに励む子、腕っ節の強い番長のような子まで、さまざまなタイプがいました。個性豊かな同級生に囲まれながら学校生活を過ごしたおかげで、どんな人ともうまくつき合えるようになった気がします。

中高ではバスケットボール部に所属し、練習に明け暮れる毎日。帰宅する頃にはヘトヘトになっていたのですが、家では夕食を食べて寝るだけでした。それでも、小学生のときに読んだシェヴァイツァーの伝記が心に残っていたんです。高校で進路を考えると、自然と「医者として海外で働きたい」と考えました。そして受験勉強に力を入れ、努力の末、医学部に合格。医者への第一歩を踏み出します。

ただ、1、2年次は勉強がそれほど忙しくなかったのが、部活動に力を入れていました。大学からは個人競技に挑戦しようと剣道部へ。3年次には先輩から体育会の役員も頼まれました。

この仕事がいよいよほか楽しくて。さまざまな運動部の学生と話す機会が生まれました。各種イベントを運営するのもおもしろかったです。多くの人と協力するという経験は、今の仕事に間違いなくつながっています。

けれど役員の仕事に打ち込むあまり、海外への意識が薄れていきました。しかし、再び意識を向けるきっかけが生まれます。それもまた、体育会役員の仕事でした。中国の大学から「学生同士の交流を深めるため、中国に來ませんか」という手紙が送られてきたのです。当時はまだ気軽に海外旅行ができる時代ではなく、私も含めて大半の学生は外国に行った経験がありませんでした。だから体育会のメンバー全員が「海外に行ける!」と活気づきました。しかし、中国に行くための旅費は自分たちで集めなければなりません。そこで私はロックバンドのコンサートを企画し、チケットを売って資金を集めることに。全員で協力し、なんとか旅費を集めることができました。

そして初めて海外へ。中国を訪れたときのインパクトは今も覚えています。大勢の人が自転車に乗って道を行き来し、建物も衣服も食べ物も日本とはまるで違う。世界に飛び出したということを実感し、ものすごく興奮しました。

## 初めての国際協力活動で進むべき道が見つかる

中国での体験により、国際協力に関

する仕事への憧れが一段と強くなりました。そんなとき目にとまったのが、国立病院医療センター（現在の国立国際医療研究センター）の新聞広告です。研修医募集という内容を見た瞬間、「ここに就職すれば夢がかなえられる」と思った私は、迷うことなく応募。

外科の研修医として働き始めました。私が働き始めた1980年は、日本政府がカンボジア難民救済事業を本格的にスタートさせた年でもあります。現地での医療活動を行うメンバーの募集がかかったとき、私は真っ先に手を挙げました。病院に就職してまだ1か月足らず。無謀なチャレンジをしようとしたものです（笑）。当時の私は「海外へ行きたい!」という気持ちが先走り、自分が現地で役に立てるかどうかなど全く考えていませんでした。

結局、経験の少なさから、その年は参加できず。しかし翌年、再びカンボジア難民救済事業に参加する機会が訪れ、晴れて正式メンバーに。カンボジアで医療活動を行うことになりました。私は現地へ行く前、これまでと大きく異なる環境での仕事は難しだろうと、多少の不安を抱いていました。しかし、実際にカンボジアの人たちと接していく中で、外国の人だって同じ人間だということを実感しました。相手

の気持ちに寄り添ってコミュニケーションをとれば、理解し合うことができ。それがわかってから、不安は消えていきました。

「過去の自分から質問!」  
どうしてそんなに  
がんばることが  
できたの?」



もちろん、限られた医療機器しかない環境での治療は大変です。病人や負傷者をなんとか治しても、貧困による食料不足で命を落とす人も多い。私は外国語もあまり得意ではなかったもので、その面でも苦労しました。でも、現地の人たちが私たちを全力でサポートしてくれているんです。そういう姿勢が何よりも心強く、常に前向きな気持ちを持つことができました。同時に「一時的な医療支援だけではなく、この国の貧困を解決するために根本的な問題を解決することが必要だ」「現地の人々が中心となる体制を築かないといけない」など、多くの気づきを得ました。

帰国後は、外科医として日本と海外それぞれの病院で経験を積みました。カンボジアで



「今の自分が答える！」

たくさんの人と触れ合い、  
支え合う関係を築いてきたから。  
皆で協力することで  
社会は変えられる



■ 若い世代を育てるため、国際保健基礎講座の講師を務める。■ 中学校を訪問して講演を行う。■ 国際医療協力局のスケジュール表。大半の職員は海外に赴いている。

の活動にも繰り返し参加し、国際協力に対する情熱は高まるばかり。仕事と並行しながら、NGOのメンバーと月に1回集まり、勉強会を開催していました。これがきっかけで、今度はエチオピア飢餓被災援助に参加。その後、ボリビア、パキスタン、ホンジュラスなどでも長期の医療活動に従事しました。

現在は、開発途上国の医療や保健衛生の向上を図るために活動する国際医療協力局のリーダーとして、現場の医療システムの構築に力を入れていきます。また自分の経験を若い世代に伝え、国際協力の現場で活躍する人材を育てることも大きな目標です。

「国際協力」と聞くと、特別な使命感を持った人を想像するかもしれませんが、しかし私のモットーは、いつも楽

しく前向きに。明るい気持ちは周りの人たちにも伝わり、「一緒にがんばろう」という空気が自然と生まれます。おかげで、今日まで仕事で苦しみを感ずることは、ほとんどありませんでした。

### 失敗を恐れず 果敢に挑戦しよう

これまでの仕事を通じて、私はたくさんの人々と触れ合ってきました。その中で学んだことは、「仕事を一生懸命やれば、必ず仲間はずいてきてくれる」ということです。育った環境や人種を超えて信頼関係を築き、仲間と喜びを共有できる。それが仕事の喜びなのです。

だからこそ若い人には、たくさんの人と交流してほしい。その積み重ねを通じて、人と人をつなぐ絆のすばらしさに気づくことでしよう。

アドバイスとしては、もう一つ伝えたいことがあります。それは、結果を恐れず、まずはチャレンジしてみるということです。「思うような成果が出なかったらどうしよう」と心配ばかりして、結局何もせずに終わる。そんな人生が楽しいでしょうか？ それよりも自分の目標を見定め、懸命に打ち込むことが大切です。

長い人生において失敗や困難はつきもの。それを恐れず、チャレンジを続けてほしいですね。その経験こそが、人生を豊かにしてくれるでしょう。